

②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の保存修復に関する国際共同研究 〔第1期〕東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究（セ03）	国際文化財保存修復協力センター	55
敦煌莫高窟壁画の保存修復研究―日中共同研究―（修02）	修復技術部	56
中国文化財保存修復に関する調査・研究 （龍門石窟の保存修復に関する調査研究）（セ04）	国際文化財保存修復協力センター	57
中南米諸国文化財保存修復協力事業 ―第1期 パナマ歴史地区の保存修復協力事業―（セ01）	国際文化財保存修復協力センター	58
在外日本古美術品保存修復協力事業（修05）	修復技術部	59
文化財保護に関する日独学術交流（保04）	保存科学部	60
北米の文化財保存研究機関との国際研究交流（保05）	保存科学部	61
アジア文化財保存セミナーの実施（セ06）	国際文化財保存修復協力センター	62
西アジア諸国等文化遺産保存修復に関する調査研究・技術移転・人材育成事業 第1期アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業（セ26）	国際文化財保存修復協力センター	63

文化財の保存修復に関する国際共同研究

〔第1期〕東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究

(②セ03-03-3/5)

目 的

タイ、カンボジア、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とするものである。当面はタイ国文化省芸術局との共同研究、および、カンボジア国のAPSARA（カンボジア政府アンコール・シエムリアップ地域保護管理機構）との共同研究を軸に行っている。

成 果

カンボジアのアンコール遺跡群の保存修復プロジェクトについては、アンコール遺跡群のタ・ネイ（Ta Nei）遺跡を研究サイトとして「特に劣化の著しい部位の特殊環境の計測と解析」および「外観が著しく変化した石彫レリーフのクリーニングと保護処置」を行っている。2001年3月に当地に設置した無電源連続環境計測システムは順調に作動しており、2002年12月にデータの回収を行い、解析処理を行ってデータ集を作成した。表面に苔類、藻類、地衣類が着生し、また自然風化による変色が著しい石材の、ジェルパック法によるクリーニングとシリコーン樹脂含浸による強化防水処置についての現地実験についても、共同で研究を進めている。種々の変色について、システムチックな現地処理実験を進め、この処置の有効性が証明されつつある。また、新しいタイプの地衣類、蘚苔類除去剤についても効果評価実験を開始した。

日・タイ共同研究として、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡をフィールドとした調査研究を行っている。アユタヤ遺跡のラチャブрана寺院、スコータイ遺跡のスリサワイ寺院とスリチュム寺院における環境計測調査を継続して行っており、2002年12月～2003年12月のデータを解析してデータ集を作成した。スリチュム寺院大仏の保存修復処置後の経過観察と今後の保存計画策定のための調査研究を行っており、現地シミュレーション実験を進めている。パイロット事業としてのアユタヤ遺跡のマエナムプルエム寺院の修復については、周辺整備、構造補強、屋根替え、外装修復に引き続き内装修復を行って事業が完成した。

2003年12月には、世界を代表する石造文化財保存修復の専門家（イコモス・国際石造物専門委員会のメンバー）をタイ、カンボジアに招へいして、まずバンコクで会議を行い、その後、タイ、カンボジアの遺跡をバスで訪れ、最後に再びバンコクで会議を行った。各現場では活発な質疑応答と討議が交わされた。特に東京文化財研究所が共同研究を行っているアンコールのタ・ネイ遺跡では、石材の生物劣化とその防除法について真剣な討議が行われた。

ベトナムのチャンパの遺跡であるミソン遺跡の劣化と保存修復に関する国際共同研究を開始すべく、ベトナム情報文化省との協議とミソン遺跡の現地調査を行った。

研究組織

○斎藤 英俊、二神 葉子、朽津 信明、岡田 健、野口 英雄、友田 正彦、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）、西浦 忠輝、石崎 武志（保存科学部）、内田 昭人（修復技術部）、重枝 豊（日本大学）



バンコクでの会議



タ・ネイ遺跡でのディスカッション

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究—日中共同研究— (②修 02-03-3/5)

目 的

敦煌莫高窟壁画の保存と修復技術の開発を目的として共同研究を行っている。第53窟を実験フィールドとして修復履歴管理システムの開発、壁画剥落止め材料の開発、壁画彩色技法の光学的調査方法の開発、修復用語集の編集などの研究を進めている。

概 要

第4期共同研究における実施項目は、①壁画修復履歴管理システムの運用と改良、②壁画修復材料の試験施工と改良、③光学的方法による壁画彩色技法の調査方法に関する研究、④壁画修復用語集の編集、⑤第53窟壁画修復の実施などである。

本年度は、修復実施を踏まえた壁画のデジタル写真撮影を行い、壁画全体の正射投影画像を作成するための基本写真の撮影および詳細写真の撮影を終了した。修復材料の検討については、敦煌研究院職員と共に東京文化財研究所において補修用擬土の試験を行った。従来、莫高窟で使用している擬土は、澄板土（莫高窟前を流れる大泉河に堆積した粘土）、麻繊維、酢酸ビニルエマルジョンを材料としたものであるが、流動性が悪い、乾燥後の収縮が大きい、乾燥後の重量が大きいために、本来の壁画に新たな負荷を生じさせるなどの欠点があった。そのような欠点を改良するために澄板土、珪藻土、カーボンファイバー、メチルセルロースを材料とした擬土を試作した。改良した擬土は、従来の擬土に比べて収縮が小さく流動性があり、珪藻土やカーボンファイバーの混入によって重量も軽くなった。さらに岩盤と土壁の間を充填接着するために必要な接着力も十分にあり、改良擬土は従来型の擬土よりも優れていることがわかった。

<学術雑誌等への掲載論文数> 1件

青木繁夫他 「莫高窟第53窟の壁画修復に用いる擬土について」 『敦煌莫高窟壁画の保存修復研究報告』 04.3

<報告書> 1件

『敦煌莫高窟壁画の保存修復研究報告』 04.3

研究組織

○青木 繁夫、早川 典子、森井 順之（以上、修復技術部）、中野 照男、勝木言一郎（以上、美術部）、石崎 武志、早川 泰弘（以上、保存科学部）、井手誠之輔、城野 誠治（以上、情報調整室）、岡田 健（国際文化財保存修復協力センター）



補修用擬土透過性試験

中国文化財保存修復に関する調査・研究 (龍門石窟の保存修復に関する調査研究) (②セ 04-03-3/5)

目 的

中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

成 果

1) 人材養成

龍門石窟研究院から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ、長期研修を実施している。2003年1月から国際協力事業団(JICA)の資金援助を受けて研修を続けていた范子龍氏が、9カ月間の日程を終了し9月末に帰国した。研修では、鎌倉市の丘陵部に現存する「やぐら」を対象に、降雨量と窟内の含水率の変化を観察し、窟内壁面の風化・劣化との関係について有効な成果をあげた。その成果は日本応用地質学会でも発表された。また、個別のテーマによって実施する短期研修では、2004年3月11日から24日までの2週間、高東亮研究員を招へいし、石造物の風化の定性・定量評価と修復材料に関する研修を行った。これに関係して、北京大学考古文博学院胡東波助教授(修復材料)を同時に招へいし、高氏の研修に適切なアドバイスを仰ぐとともに、3月12日には「文化財の風化状態評価に関する研究会」を開催し、日本の研究者との研究交流をはかった。

2) 画像データの収集と写真管理方法に関する共同研究

石窟の現状を記録し、石窟芸術の素晴らしさを多くの人びとに知らせ、同時に龍門石窟研究院における写真管理の方法を研究するため、両機関は財団法人文化財保護振興財団からの助成を受け、5カ年をかけて主要洞窟を撮影している。2003年度はその第2年目にあたるが、2月に中国で発生した重症急性呼吸器症候群(SARS)の影響により、夏までの期間、中国への渡航ができなくなり、準備の時間が不足したため、いったん内定のあった助成を辞退し、あらためて2004年度から残りの4ヶ年についての作業を行うことにした。本年度は平成14年度にユネスコ事業に関連して皇甫公窟での精細画像データを収集した分について、引き続きその画像処理作業を実施した。3月11日からは2週間の日程で情報資料センターの侯玉珂主任を招へいし、当研究所における写真資料の管理方法について研修を行った。

3) 龍門石窟研究院主催「龍門石窟保護のための検討会」出席

龍門石窟研究院は世界遺産龍門石窟を将来にわたって保護していくための指針を作るため、2003年7月21日、22日の日程で、初めて中国国内の文化財保存の専門家を招いた「龍門石窟保護検討会」を開催した。当研究所が招待され、龍門石窟保護のための意見を述べる機会を得るとともに、豊かな経験を持つ中国の専門家との交流をはかることができた。

4) 韓玉玲副院長の招へい

共同事業の円滑な運営をはかるため、文化庁の平成15年度アジア諸国美術館博物館等協力事業により2月29日から3月8日の日程で韓玉玲龍門石窟研究院副院長を招へいし、当研究所を視察していただくとともに、外務省、東京藝術大学、財団法人文化財保護振興財団等を訪問し、今後の龍門石窟保護活動について意見を交換した。また、奈良県法隆寺など関西地区の世界遺産を視察していただき、その運営活用に関して意見を交換した。

研究組織

○岡田 健、斎藤 英俊、朽津 信明、秋山 純子(以上、国際文化財保存修復協力センター)、西浦 忠輝、石崎 武志(以上、保存科学部)、中野 照男(美術部)、城野 誠治(情報調整室)、津田 豊((株)ジオレスト)、中田 英史((株)文化財保存計画協会)

中南米諸国文化財保存協力事業 —第1期 パナマの歴史地区の保存修復協力事業— (②セ 01-03-3/5)

目 的

中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明の遺跡やスペイン植民地時代の中世都市など、世界的にみて価値の高い文化財が多く残されている。これらの国々の遺跡や歴史的建造物は、木造・石造・レンガ造などであり、それらの多くは虫害・風化・劣化などによって文化財的価値が失われる危機に瀕している。東京文化財研究所は、これまでは主にアジアの文化遺産を中心に国際協力を実施し成果をあげているが、パナマ政府からの協力依頼を契機に、中南米諸国との研究協力を推進しようとするものである。

中南米諸国の専門家と協力して文化財保存修復に関して研究を行うことは、これまでとは異なった地域における経験を豊富にし、研究の進展と普遍化に役立つとともに、相手国の専門家養成と専門知識及び技術の移転に関して効果的な国際貢献ができると期待される。

両国の協力事業をより円滑かつ広汎なものとするために、2002年2月、東京文化財研究所とパナマ文化庁は研究及び交流の合意書を取り交わした。

成 果

1) パナマ人専門家の招へい

パナマの文化財保存専門家1名を、2003年9月20日から12月19日の日程で招へいした。9月25日から10月24日まで奈良で開催されたワークショップ「アジア太平洋地域文化遺産保護調査修復研修—木造建造物の保存と修復—」(ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所主催、文化財研究所共催)に参加して日本の木造建造物の保存修復の理念・方法と日本の文化財保護制度について基礎的な事項を学んだ後、国際文化財保存修復協力センターにおいて木造建造物の保存について指導を受けるかわら、国庫補助事業により修理事業が進行中の重要文化財坂野家住宅(茨城県水海道市)において木造建造物の痕跡による復原方法の現場実習を行った。また京都への研修旅行を実施し、市民参加による町家再生事業・伝統建造物保存運動について現場見学を行った。研修生は、日本における木造建造物の保存修復の理念と実際から、公的機関による文化財保護制度、市民参加による町家・町並み保存まで幅広く研修し、所定の成果を収めて帰国した。

2) 都市保存に関する国際セミナーのパナマでの開催

協力事業の対象となっているパナマ市歴史地区カスコ・アンティグオは17世紀末期に形成されたもので、3本の東西道路を軸とした基盤目状の街区には、19世紀初期の独立以前のものを含めた数百の伝統的建築が並び立ち、多様な中にも統一感のある歴史的価値の高い地区であり、世界文化遺産として登録されている。

この地区の保存に携わる人材を育成し、地区住民を含むパナマ市民の都市保存に関する意識を高め、同時に通常交流の少ないアジアと中南米との情報交換をはかることを目的とし、昨年度に引き続き、パナマ文化庁カスコ・アンティグオ保存事務所と共同で2004年2月に都市保存に関する国際ワークショップを開催した。今年度は「世界遺産都市と歴史地区の保存と活性化—公的計画と民間のイニシアチブ、特に維持管理を中心にして」をテーマとし、日本、パナマ、コロンビア、メキシコ、フィリピンにおいての、選定された世界遺産都市・集落の多面にわたる維持管理と、住民の貢献に関して、情報交換を行い互いに学び合った。日本からは、江面嗣人文化庁主任文化財調査官が「日本の伝統的建造物群保存地区制度とその目的について」、大槻洋二萩市建設部まちなみ対策課専門官が「山口県萩市の伝統的建造物群保存地区の保存におけるコミュニティの保全と人的ネットワークの果たす役割」というテーマで報告を行った。また、昨年引き続きカスコ・アンティグオを視察して同地区の保存について意見の交換を行った。

研究組織

○岡田 健、稲葉 信子、斎藤 英俊、野口 英雄、宗田 好史、平賀あまな(以上、国際文化財保存修復協力センター)

在外日本古美術品保存修復協力事業 (②修 05-03-3/5)

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。この事業により修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米に出張し、作品調査、修復技術について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについても協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理、保存、輸送手続きに責任をもって当たっている。

この修復協力事業によって修復された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって日本古美術品に対する感心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

概 要

平成 15 年度は、継続修理を含む絵画 7 件、工芸品 5 件の作品を修復した。

<絵画>

1. 「不空羅索観音二神将像」 大英博物館所蔵
2. 伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」(田植え) ミネアポリス美術館所蔵
3. 伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」(灌水) ミネアポリス美術館所蔵
4. 「十一面観音菩薩像」 サンフランシスコ東洋美術館所蔵
5. 俵屋宗達画本阿弥光悦書「鹿下絵和歌巻」 シアトル美術館所蔵
6. 「芭蕉図屏風」 ホノルル美術館所蔵
7. 伝土佐光吉筆「源氏物語図屏風」 ホノルル美術館所蔵

<工芸品>

1. 「唐草螺鈿空穂」 メトロポリタン美術館所蔵
2. 「移鞍(手向山神社旧蔵)」 メトロポリタン美術館所蔵
3. 「源氏蒔絵化粧箱」 バイエレン国立民俗博物館所蔵

なお、次の作品は 2 年継続の 1 年目の修理作品である。

4. 「和歌浦蒔絵十種香箱」 ピーボディ・エセックス博物館所蔵
5. 「猩々漆絵油壺」 クリーヴランド美術館所蔵

平成 15 年度、絵画の事前調査ではベルギー王立美術史博物館 20 件、オーストリア応用美術博物館 4 件、ワルシャワ国立博物館 12 件の作品を調査した。また、工芸品の事前調査ではリスボン国立文化財研究所 3 件、ポルトガル国立古美術館 2 件、サンロック博物館 2 件、グルベンキヤン美術館 12 件、アジャータ宮殿 23 件、ソアレス・ドス・レイス美術館 2 件、王立デスカルサス修道院 7 件、王立エンカルナシオン修道院 2 件、国立装飾美術館(マドリッド) 8 件の漆器に関する調査を行った。

平成 14 年度に実施された絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。また、この事業の庶務を管理部、修復に関する調査・修復業務・報告書作成を修復技術部と美術部、写真記録の作成および整理業務を情報調整室がそれぞれ担当した。

<調査・研究報告書等刊行数> 1 件

『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成 15 年度(絵画/工芸品)』 東京文化財研究所 04.3

研究組織

○青木 繁夫、加藤 寛(以上、修復技術部)、渡邊 仁之(管理部)、井手誠之輔、綿田 稔、城野 誠治(以上、情報調整室)、中野 照男、鈴木 廣之、勝木言一郎、津田 徹英、塩谷 純(以上、美術部)、斎藤 英俊、稲葉 信子(以上、国際文化財保存修復協力センター)

文化財保護に関する日独学術交流 (②保 04-03-3/5)

目 的

日本とドイツの間では、1974（昭和 49）年に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、1990（平成 2）年の第 13 回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、1992（平成 4）年から交流が開始された。本研究は日本とドイツ両国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

概 要

平成 15 年度よりドレスデン工科大学との間で「石造文化財、石造建造物の保存」に関する共同研究を行っている。2003 年には、7 月から 9 月にかけての 2 ヶ月間、保存科学部の石崎がドレスデン工科大学を訪問し共同研究を行った。研究テーマは、建材に使われている石材、断熱材などの多孔質材料中の水分移動、熱移動に関するシミュレーション手法、水分特性測定法の研究である。具体的には、北海道開拓の村で行っている土壁中の水分変化、温度変化を温湿度や日射などの環境条件をもとにシミュレーションを行い観測結果と比較した。また、多孔質体中の水分移動に関する研究は、高松塚古墳のような、地盤中の水分移動の評価、予測に関しても重要であると考えられる。

2003 年 11 月には、ドレスデン工科大学建築環境研究所のハウプ教授、研究員のグルネワルド氏、プラーゲ氏、フェヒナー氏を招へいして、「石造文化財、石造建造物中の水分移動解析と水分特性の測定」に関する研究会を開催したほか、プラーゲ氏らと、X 線を用いた多孔質材料の水分特性測定を共同で行った。

また、『Historical Polychromy: Polychrome Sculpture in Germany and Japan』（日独共同出版）の技術論文、「浄瑠璃寺四天王の彩色について」の日英翻訳を行った。

研究組織

○石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘、西浦 忠輝（以上、保存科学部）、三浦 定俊（協力調整官）、津田 徹英（美術部）、孫 喜山（鳥取環境大学）



ドレスデン工科大学でのセミナーの様子



X 線を用いた多孔質体中の水分特性測定の共同実験

北米の文化財保存研究機関との国際研究交流 (②保 05-03-3/5)

目 的

北米には、世界を代表する文化財の研究機関が所在する。その例として、アメリカにはフリヤ・サックラー美術館が所属するスミソニアン研究機構やゲティ保存研究所があり、カナダにはカナダ保存研究所 (CCI) などがある。それらの研究者と、文化財保存に関する実りある国際研究交流を行うことを目的とする。

概 要

平成 15 年度は、これまでに引き続き、カナダ保存研究所との国際研究交流を行った。カナダ保存研究所 (CCI) は 1972 年にカナダ国内の文化財保存のために設立された研究所で、カナダ文化財局に所属している。CCI は、保存環境に関する研究を積極的に進めているだけではなく、北米を中心に世界中の博物館、美術館等に対して保存のための助言や指導を行っている。

ここ 10 年ほどの間に、世界の博物館、美術館などで、地球環境や人の健康を守るため大規模燻蒸を避けようとする気運が高まり、害虫の被害を未然に防ぐ予防対策や、大規模燻蒸以外の代替殺虫法の普及が進められている。わが国も 2004 年末に臭化メチルの全廃を控えており、代替システムへの移行に東京文化財研究所も全力で取り組んでいるが、カナダではすでに燻蒸以外の代替殺虫法へ移行しており、代替法やシステムの研究、運用で学ぶべき点が多くある。そこで、平成 15 年度には、保存科学部の木川が CCI を訪問して、研究者間でこの分野の研究交流を行うとともに、CCI の Tom Strang 氏の協力を得て、カナダの博物館、文書館を訪問し、担当者との協議することにより、代替システムの運用の実際と方法論についても調査を行った。

研究組織

○佐野 千絵、木川 りか、石崎 武志、早川 泰弘、吉田 直人、西浦 忠輝 (以上、保存科学部)



CCI におけるセミナー



CCI の研究者との研究協議

アジア文化財保存セミナーの実施 (②セ 06-03-3/5)

目 的

アジア文化財保存セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行い、日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として開催されている会議である。平成13年度から5カ年の時間をかけ、日本を含む9カ国の専門家が一堂に会し、各国における文化遺産保護の制度とその運用について調査研究を行い、各国の文化遺産保護制度についての認識を広く共通のものとし、保護のための有効な理念の確立と、より強固な協力関係の構築をめざすことを目的としている。

概 要

平成13年度の第10回セミナーでは、各国から文化財保護に関する法律の内容とその成り立ちについて、翌年の第11回セミナーでは、機構・体制とその運用の状況についての報告があった。これを受けた今回の第12回セミナーでは、保護制度と社会の関係、つまり信仰または宗教、民族問題、経済問題との関わりについて各国の報告を聞き、討論を行った。

日 時：2003（平成15）年12月8日～12月12日、会 場：東京文化財研究所会議室、出席者数：15名、
テーマ：文化遺産の保護制度と社会—信仰または宗教、民族または民俗、経済—

報告と議論の主な内容：

急速に変化する社会の中での民俗文化遺産の保護（文化遺産の担い手の構造変化、少数民族の文化遺産保護）、生きている宗教文化遺産（保存の論理と信仰の調和、文化遺産保護の枠組みの中での宗教の取り扱い）、経済開発と保存（都市への人口集中、依然として難しいアジアでの町並み保存、貧困の解消・平等・平和に貢献する文化遺産保護活動）、アジアにおける無形文化遺産の可能性

12月8日 セミナー第1日（東京文化財研究所）

10：30 開会式 挨拶 東京文化財研究所 渡邊明義

10：50 趣旨説明 東京文化財研究所 稲葉信子

11：10 「社会の変化と多様な文化遺産を保護する制度との関係—日本の事例」 東京文化財研究所 岡田健

14：00 「変化する社会政治および経済環境と韓国の文化遺産管理システム」 韓国国立中央博物館考古部
金権九

15：30 「文化遺産の保護制度と社会—信仰、民族、経済—中国の事例」

中国清華大学建築学院建築歴史及文物建築保護研究所 呂舟

12月9日 セミナー第2日（東京文化財研究所）

10：30 「ベトナムにおける社会システムと文化遺産保護」

ベトナム文化情報省保存博物館局 グエン・クオック・フン

11：30 「タイ文化の発達と適応：名残と変化」 タイ芸術総局遺跡記念物部 ピチャヤ・プーンピノン

14：00 「サン・セバスチャン大聖堂の保存」 フィリピン国立歴史研究所 エメリタ・V・アルモサーラ

15：30 「変化する社会における文化遺産保存」 イラン文化財機構 アデル・ファランギ・シャベスタリ

12月10日 セミナー第3日（東京文化財研究所）

10：30 「聖なる遺産と社会」 インド世界記念物基金プログラムアドバイザー アミタ・ベイ

11：30 「スリランカにおける文化遺産の保護制度と社会」

スリランカ・ケラニア大学 ジャガス・ウィーラシンハ

15：00 総合討議

17：00 閉会式

12月11日～12日 スタディーツアー（静岡県、山梨県）

研究組織

○稲葉 信子、斎藤 英俊、岡田 健、山内 和也、朽津 信明、二神 葉子、秋山 純子、平賀あまな、大竹 秀実、野口 英雄、井上 敏（以上、国際文化財保存修復協力センター）

西アジア諸国等文化遺産保存修復に関する調査研究・技術移転・人材育成事業
第一期アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業 (②セ 26-03-1/2)

研究組織

○斎藤 英俊、稲葉 信子、山内 和也、前田 耕作（以上、国際文化財保存修復センター）、渡邊 明義（所長）